

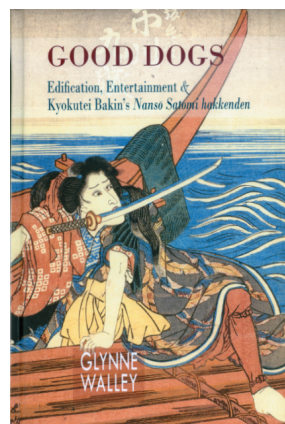
グリン・ウォーリー

『グッドドッグ』

——啓蒙、娯楽、そして曲亭馬琴の「南総里見八犬伝」

Glynné Walley, *Good Dogs: Edification, Entertainment and Kyokutei Bakin's Nansō Satomi hakikenden*

ローレンス・マルソー



Cornell East Asia Series, 2017

曲亭馬琴（一七六七～一八四八）の代表作である長編読本『南総里見八犬伝』（一八一四～一八四二刊、以下『八犬伝』と呼ぶ）は、学校の国語教科書に載っているほど日本文学の代表的作品の一つとされているが、『源氏物語』や『徒然草』のように一般には親しまれていないようである。その膨大な量がこの原因の一つだろうが、それよりもっと重要な原因には、坪内逍遙（一八五九～一九三五）が発表した『小説神髓』（一八八五～一八八六刊）の厳しい『八犬伝』批判に拠るところが大きいと思う。本書の著者であるグリン・ウォーリー氏が述べるように、逍遙は『八犬伝』の欠点を勧善懲悪が作品のテーマにしているところに着目している（pp. 36-39）。逍遙にとって、小説たる文学作品の本来の意義とは、当時の西洋小説に表れている「リアリズム」にある、と述べ、「勸

懲」を基盤にしている『八犬伝』は、このリアリズムを無視し、本来の「小説」に及ばない、と述べている（同上）。

ウォーリー氏のこの著書は、『八犬伝』の作品論でありながら、馬琴への「戯作者」（近世後期の小説家）としての作家論でもある。*Good Dogs*を分析する前に、『小説神髓』の『八犬伝』批判から論考を始めると思っていたが、その予想はかなり違っていた。単純に「逍遙」や『小説神髓』を取り上げるのではなく、その根底にある「まともに対応する・真剣に取り扱う」（“How seriously should we take...?” p. 1）ことから出発する。中国伝来の朱子学では、韻文である漢詩や和歌が詩論・歌論の対象として論じるに値するものであったが、物語や小説の散文創作（所謂「フィクション」）を理論の対象とする学者は近世後期までほとんどいなかった。しかし、

ウォーリー氏が論じるように、馬琴は自分の（そして他人の）読本などを珍しく「まともに」取り上げていた。そして、『小説神髓』をよく読むと、『八犬伝』を批判しながらも、逍遙がそれを「小説」^{ノヴェル}として真面目に対応している。しかも、明治から大正・昭和にかけて『八犬伝』が文学として軽視されていくが、一九〇〇年代に北村透谷（一八六八〜一八九四）も『八犬伝』を「まともに」読もうとしている（pp. 15）。ウォーリー氏は透谷の記事を注目し、分析しているが、このような新鮮な着目が *Good Dogs* に富んで、読み応えを与えてくれている。

Good Dogs は、七つの章から構成されている。第一章は「総論」で明治期の『八犬伝』観から近世小説と近代文学の解釈の違いを論じている。第二章は、「戯作」の概念から近世小説を論じている。第三章は、『水滸伝』などの中国小説が近世の作家たちによって、翻案され日本化されている動機について論じている。第四章は、「勸善懲悪」と社会批判について取り上げている。第五章は、『八犬伝』におけるジェンダーに着目し、論じている。第六章は、『八犬伝』に登場する武士階級における道德観及び社会全体の階級構成について論じている。そして、最後の第七章では、八犬士（八犬伝）中の八人の主人公）に関する善と悪の問題について論じている。附録として二三ページに及ぶ『八犬伝』の梗概を載せてくれている。

近世小説、特に『八犬伝』を「まともに」取り上げてもいいかどうかという問題提起が第一章で紹介されているが、これは本書全体の背後にある問題にもなっている。第二章も近世小説の「戯作」性を論じ、『八犬伝』の出現を追求している。第三章から第六章は、本書の中心で、『八犬伝』を鋭く分析している。第七章は長いが、善悪という観点から『八犬伝』の意義及びこれからの研究に様々な問題を提示してくれている。

本書の最大の貢献は、『八犬伝』を代表として近世小説における「啓蒙」(edification)と「娯楽」(entertainment)への追求にあると思う(両方の用語がこの本の副題に入っていることも当然だろう)。営利目的としていた近世期の出版書肆^{しやうし}は、その中期から近代にかけて、「戯作者」と自称していた作者たちに原稿を頼み、娯楽性の高い作品を次から次へ出版していた。その娯楽性によって、近代に入ると多くの小説家や評論家が近世の文学を欧米の小説に劣ると決めつけ、欧米小説を基準にして「真面目」な作品だと見なした小説を高く評価することにした。明治中期に入ると、小説から挿絵が消え、主人公の心理的葛藤などが多くの小説のテーマになってくる。しかし、ウォーリー氏が論じるように、『八犬伝』を含む多くの近世小説の中から(読み方次第で)読者の生き様、または当時の社会で通じていた価値観を考えさせるところがある、と言つても過言ではないだろう。勸善懲悪を含む啓蒙性だけだと、作品は面

白く読まれない。娯楽性のみになると、はなしほん 嘶本のようなジョークブックで終わり、読者が読んで捨てるのみの本になってしまう。ウォーリー氏がここで詳しく追求しているように、この問題に馬琴が早くから取り組み、長年にわたって『八犬伝』を磨き上げ、啓蒙性も娯楽性も見事に交えて日本文学史を通して誇るべき傑作を生み出すのである。この本を読んで、多くの問題点を考えさせられたが、これによって『八犬伝』を丁寧^{ていねい}に再読し、馬琴の他の読本をも読みたくなってきた。Good Dogsがいつか日本語に訳され出版されることを望むばかりである。